

小児中耳炎症例から分離された インフルエンザ菌のbiofilm形成能と難治化

森 山 智 美 保 富 宗 城 Dawan. S. Billal

山 内 一 真 山 中 昇

和歌山県立医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科

近年、無莢膜型インフルエンザ菌（NTHi）が引き起こす中耳炎、気管支炎等の気道感染症において高密度のバイオフィルムが形成されることが示されている。今回我々は乳幼児急性中耳炎例において分離されたNTHiのバイオフィルム形成を、抗菌薬治療著効例と無効例とで比較検討した。検体：2歳以下の急性中耳炎より分離されたNTHiのうち抗菌薬無効例16例56株と、著効例12例14株を用い、形成能の測定にはO'Toole and Kolter法を用いた。結果：抗菌薬無効例ではバイオフィルム陽性株は87.5%、著効例では25%と、抗菌薬無効例で陽性株の割合が有意に高かった。以上より抗菌薬治療に抵抗する難治性中耳炎症例においてバイオフィルム形成株が検出される割合が高く、バイオフィルム形成が小児急性中耳炎の難治化に関与していることが考えられた。